

(社) 高山市文化協会

平成十五年六月二十二日

第三回市民歴史散歩

東山寺院墓地の

石碑を訪ねて

〈資料〉 高山市郷土館

川上別邸、宗猷寺裏側の墓地にある金森左京墓、木地師の墓、山岡鉄舟父母の墓、善応寺、法華寺方面、法華寺の加藤光正、加藤歩嘯、大原郡代妻の墓、楠木・三原夫妻の碑、その他、時間があれば、素玄寺、大雄寺、雲龍寺の墓地へと巡り、句碑、墓碑、記念碑などを見てまわる。

宗猷寺 一、宗猷寺山門扁額 二、本堂 三、山岡鉄舟父母の墓 四、山岡鉄舟碑
五、遭難者供養塔 六、鈴木吟風句碑 七、白牛車塔 八、金森左京重勝墓
九、木地師の集団墓地

善応寺

法華寺 十、法華寺番神堂 十一、本堂 十二、加藤清正銅像台石
十三、加藤氏三代句碑 十四、上木雨夕墓 十五、玄節融明寿徳墓
十六、加藤光正墓 十七、木村昌悦夫妻墓 十八、大原彦四郎紹正室墓
十九、加藤歩簫墓 二十、楠木・三原夫妻碑 二十一、白野啓助碑

天照寺 二十二、松平忠輝

神明神社 二十三、神明神社絵馬殿

素玄寺 二十四、大原楚諾墓碑 二十五、金森家墓の跡 二十六、増田作右衛門頼興室墓
二十七、杉原屋平八墓 二十八、竹母辞世句碑 二十九、白牛車塔
三十、素玄寺本堂

大雄寺 三十一、大雄寺鐘堂 三十二、山門 三十三、十王堂
三十四、田口五郎左衛門嘉古墓 三十五、貝塚素牛墓 三十六、徳本行者墓
三十七、滝井孝作墓 三十八、都竹しめ路墓碑 三十九、丸川江崖碑
四十、赤田臥牛墓

雲龍寺 四十一、森宗弘墓 四十二、津野滄洲墓 四十三、指田父子墓碑
四十四、土屋秀世墓碑 四十五、金森将監母墓 四十六、阿保春林墓
四十七、人間百部一塔 四十八、大乘妙典一石一字塔
四十九、法華経千部供養塔 五十、大護摩千座供養塔 五十一、雲龍寺鐘楼門

一、宗猷寺山門扁額

「真龍山」の山号が書かれており、朝鮮の紫峯書とある。

二、宗猷寺本堂

基壇上に建ち、前面三方吹抜け、敷石床となった禅宗様式の強いこの本堂は、文政七年（一八二四）八月二十六日落成され、大工棟梁は坂田半三郎であった。量感ある外観をもち、仏殿や法堂（講堂にあたる）の基本形である敷石・床を前面に、内部を畳敷きとしたことは、その古い形式をよく表している。

五山の仏殿や法堂にならって外観を二重にするとともに、和様や大仏様の手法も取り入れている。昭和五十年市指定文化財。

桁行一八メートル、梁間一五・九メートル、木造入母屋造、銅板平葺。

三、山岡鉄舟父母の墓

東山宗猷寺本堂前に二基並んでいる。父の墓は棹石正面に「徳照院殿雄道堅達大居士」とあり、周囲に石柵をめぐらし、柵前に元締斎藤弘道・進野保寿・岩田幸通奉納の石燈籠一対がある。碑高二メートル。母の墓は棹石正面に「喬松院雪操貞顕大姉」とあり、周囲に石柵をめぐらし、柵前に小野高堅・塚原直昌・加藤師父造立の石燈籠一対、燈籠前に喬松院菩提のために設けた六道石がある。碑高一・七七メートル。昭和三十年市指定文化財。

四、山岡鉄舟碑

宗猷寺境内に父母の小野郡代夫妻の墓と並んで建っている。明治二十二年（一八八九）十月、市原六兵衛らの発起で高山の有志が建てた。碑高四メートル。

五、遭難者供養塔

宗猷寺境内の西北隅にある。安永二年（一七七三）の大原騒動、明治二年（一八六九）の梅村騒動に非業の死を遂げた人々を供養し、明治二十四年四月十六日、高山町の有志が建てた。碑高一・五メートル。

六、鈴木吟風句碑

宗猷寺の境内にある。名は栄規、通称唯七。雲南亭主人と号す。地役人だったが、明和六年（一七六九）大原代官によって摂州西ノ宮へ左遷されて同地で天明二年（一七八二）五十五歳で没した。この碑は同僚により天明六年（一七八六）に建てられた。碑高一・八メートル。

淡雪やしばしのうちの鳥の跡

七、白牛車塔

宗猷寺の墓地にある。安永五年（一七七六）十月六日、浅野氏後室建之とあるが、詳しいことはわからない。碑面に一石一字とあるから写経を埋めたものであるろう。あるいは大原騒動の義民供養碑かもしれない。碑高一・二メートル。

八、金森左京重勝の墓

宗猷寺の墓地にある。金森三代目重頼の弟、分家左京家第一代。慶安二年四月一日、帰国目前にして四十九歳で没した。法名は徽雲宗猷大居士。

九、木地師の集団墓地

木地師の墓は山間の住居近くに残すのが普通であるが、宗猷寺には九十三基の墓が一集団をなしている。禅宗帰依の木地師の寺請を宗猷寺が扱っていたためである。宝永八年（一七一二）六月在銘の墓が最も古い。昭和三五年市指定文化財。

十、法華寺番神堂

内部に社が設置され、中央には鬼子母神が祀られている。この社そのものには5つの厨子があり、安永六年（一七七七）に上棟の祈禱殿との関係が考えられる。また、享和二年（一八〇二）には五番神を堂内に奉っているとあり、法華守護の五神と考えられている。平成十二年市指定文化財。

十一、法華寺本堂

建物内部は、正面からゆったりとした広縁があり、腰唐戸の障子がやわらかい感じを与える。内陣は改造されて、法華宗の寺院様になっているが、内陣正面に見られる臺股や、欄間の花鳥彩色彫刻から桃山時代の様式を伺い知ることができ。内陣を除いて柱はすべて角柱面取がしてある。

建物外観は、間口が八間もあって重量感にあふれ、寺院様の装飾は何一つ見あたらない。木割が一般的に太く、間隔の粗い、軒廻りの太い垂木が木舞化粧裏や屋根を軽やかに支えている。両妻飾がなく、木連格子組となっているので、いっそう書院造りの風格を強調しているようである。昭和四五年県指定文化財。

桁行二〇・二メートル、梁間一五・五メートル、単層入母屋造、銅平板葺。

十二、加藤清正銅像台石

東山法華寺の境内にある。銅像は昭和十七年、太平洋戦争のために供出して今は台だけが残っている。大正元年（一九一三）八月二十二日、日韓併合記念に有志が建てたものである。高さ二メートル。裏面には清正が木村重勝に送った尺牘（書簡）が残っている。

十三、加藤氏三代句碑

法華寺の境内にある。碑高三メートルの太江石。雲橋社の宗匠・歩簫、柏翁、
越翁の句が彫つてある。押上森蔵の撰文、加藤専一の建立。

旗の音更けて師走の天の川（八十五翁しらと老人）

鷹すえて待つや日の出の大けしき（柏翁）

雪や松かけもかたちも消へぬべし（越翁）

十四、上木雨夕墓

法華寺墓道右側五段目、正方形の自然石。通名を小三郎といい、飛騨三郡惣代
の筆頭。仏典禅密に通じ、雨夕は俳名、明治十二年（一八六九）没。
ちぎり置く後世のしをりやいしのつづ

十五、玄節融明寿徳墓

法華寺墓地加藤光正墓の下方にある。西側正面に法名、南側面に文化十癸酉（一
八一三）四月二十三日とあるが本名は法華寺でもわからない。北側に次の句があ
る。

ゆふだちやここは志ばしのかりの宿

十六、加藤光正墓

東山法華寺の裏山にある。光正一周忌の寛永十一年（一六三四）七月一六日建
立、天明年間（一七八一〜八九）一部を修造した。碑高二・八五メートル。昭和
三十年市指定文化財。

十七、木村昌悦夫妻墓

法華寺墓地にある。加藤光正が高山藩主金森重頼に預けられた時、光正に従つ
て高山に來た藩医木村元春の子。建碑は寛文四年とある。

十八、大原彦四郎紹正室墓

法華寺墓地にある。明和・安永二度の大原騒動鎮圧と、検地による増石の功績

により、郡代に昇進した夫が江戸から帰高した安永六年（一七七七）八月十九日、夫を諫めて自刃した烈婦と伝えられる。この夫人について、名など詳細を伝えるものはないが、崎山新左衛門某の娘で、大草太郎左衛門の養女といわれる。

十九、加藤歩簫墓

加藤家の墓地は、法華寺山頂上にある。上下二段に区画し、上段に十七基の墓石を三列に配置してあるが、歩簫の墓は第一列の中央に位置し、「清境院幽山白翁居士」と刻まれている。標石高さ五九センチ。昭和三十一年市指定文化財。

歩簫は名を貴雄、通称を小三郎という。蘭亭歩簫、白翁（しらおう）（晩年）と号した。俳諧を泊庵蝶夢に、国学を伴蒿蹊（ほんこうけい）に学び、安永元年（一七七二）家督を相続し、父の私塾を継承した。

二十、楠木・三原夫妻碑

法華寺の墓地にある。昭和四十九年（一九七四）十月、東京中心の有志により建てられた。菱形の自然石に「楠木繁夫、三原純子の碑」と黒御影石に彫りはめ込んである。碑高一・八メートル。楠木繁夫（本名・黒田進）は高知県の人で昭和初期から戦後にかけての歌手、三原純子（本名・木村粹子）は白川村の木村家に生まれ、高山高女卒、タイヘイレコードでデビュー、後コロムビアレコードへ移り、「南から南から」等がヒットした。

二十一、白野啓助碑

法華寺の裏墓地にある。碑高二・四メートルの松倉石。元中野・海上地区の耕地整理組合長だった頃の功績をたたえて荘川村中野・海上土地改良組合が建てた。

二十二、松平忠輝

徳川家康六男忠輝は、元和四年（一六一八）三月五日高山城主金森重頼に預けられ、居所を天照寺とした。満八ヶ年を経た寛永三年（一六二六）信州諏訪へ預け替えとなった。

二十三、神明神社絵馬殿

この建物には金森藩政時代の絵馬額四面が残されている。最も古い額には「奉掛御宝前絵馬 自高山城 正保二乙酉歳八月吉日信心願主敬白」とあるが、これらの絵馬額はこの建物が移築される以前から神明神社の社殿に掲げられていたものと考えられる。

構造は四方吹抜で壁のない空間に大きな面取りをした太い角柱が立つ。角柱頭

部には美しい曲線を持つ舟形の肘木ひじきが深い軒をがつしりと受け止め、雪国にふさわしい極めて力強い手法である。建物全体が低く、屋根は緩やかな勾配を持ち、市内の、どの神社建築にも見られぬ優雅さと古さを強調している。

桁行六・三メートル、梁間四・二五メートル、単層寄棟造、銅板葺、四方吹抜け、廻縁親柱高欄付。

二十四、大原楚諾墓碑

素玄寺の墓地にある。愛宕神社の参道中程左側の、土蔵の所から入ると、すぐ分かる。大きく高い。西向き。建碑は安永八年（一七七九）晩秋で、同寺十二代・透天素閣の撰文がある。碑高一・五メートル。飛驒郡代・大原彦四郎紹正は清流亭楚諾と号し、俳社「水音社」を創始した。

法華経の功德を梅に初音かな

涼しさや高山よりも死出の山

蓮の実や飛出た数珠の尊さに

極楽の迷い子寒し雪仏

大原彦四郎紹正は第十二代飛驒代官（安永六年五月以降郡代）飛洲御用木元伐禁止、年貢金納の繰り上げ、検地及び永久石代定値段の強要によって、大原騒動の惹起となった。勝次郎照正は紹正の次男で、安永二年二月（一七七三）没。

二十五、金森家墓の跡

かつて金森家第三代までの墓がここにあったが、後京都の金龍院へ改葬され、現在は墓の跡と、主君に殉じて死んだ家士の墓が残っている。

二十六、増田作右衛門頼興室墓

素玄寺の大原郡代墓の前にある。安政の大地震の災害復旧にあたった第二十三代飛驒郡代増田作右衛門頼興の妻の墓。

二十七、杉原屋平八墓

素玄寺の大原郡代墓の北西にある。法名は独證跡栄居士、俗名は杉原屋平八、俳名善六。文化十一年（一八一四）の建立。

飼ねこの綱ふしほどくひがん哉

二十八、竹母辞世句碑

素玄寺の墓地にある。寛政七年（一七九五）八月十一日七十四歳で没している。碑高八十七センチ。

なにごころとどめん秋の月も入

二十九、白牛車塔

素玄寺の境内にある。天明三年（一七八三）に田近宗朗が天明二年の不作に際し、作物の豊穰を祈って建てた。高さ二・五メートル。

三十、素玄寺本堂

化粧屋根裏の一間通しの板廊下は、もと入口土間であった。一間半の長廊下を隔てて、中央に大間と内陣、その右側に四室、左に二室の平面を有するこの本堂は、もと大名の屋形を物語るにふさわしい書院造の遺構である。

桁行二二・八メートル、梁間一五・一メートル、単層入母屋造、銅平板葺。

三十一、大雄寺鐘堂

大雄寺記に、「鐘樓 第十世超譽白翁大和尚 元禄二己巳二月建之 四月屋根葺 終棟梁松田又兵衛、古橋長左右衛門、松山孫太郎、松田長次郎、古橋九右衛門、葺師越中富山橋本甚兵衛、橋本次右衛門、橋本忠右衛門」と記載されている。屋根は昭和四九年、柿葺であったのを修理し、銅平板葺に改めた。

二軒・繁垂木の軒廻りでありながら、他は簡素な手法で建てられている。木割が太くて柱転びもよく、柱頭貫端唐草彫刻も力強い。三斗組の組物上に勾配、反り共によくまとまりをもった入母屋造りの屋根を持つ堂々たる建物である。この

地方最古の鐘楼である。昭和四八年県指定文化財。地の間寸法三・四五メートル正方形、木造入母屋造、銅平板葺。

三十二、大雄寺山門

市内唯一の楼門造で、宗猷寺の本堂と共に東山伽藍の代表的な建物である。十本の丸柱は太くカツラ材である。落し込み板で囲まれた仁王座前の南北が、透かし菱形欄間になっている

三十三、大雄寺十王堂

死者は死後七日毎に裁きを受けるとされ、地藏背面の壁には極楽と地獄の図が描かれている。

三十四、田口五郎左衛門嘉古墓

大雄寺境内北東にある。第十六代飛騨郡代で、高山城址整備や学塾を開かせるなどした。法名は顔貌院殿誉正道義雲大居士。

三十五、貝塚素牛墓

田口郡代墓に向かつて右隣にある。田口郡代の元締で、俳人。名は典寛。

三十六、徳本行者墓

大雄寺墓地にある。幕府建立の浄土宗小石川一行院住職で、全国念仏行脚をし、高山には大雄寺に文化十三年八月に立ち寄った。説教を聞こうと大群衆が集まったという。

三十七、滝井孝作墓

大雄寺墓地の長坂寄りにある。俳人・小説家。号は折柴。高山市空町生まれ。正面に滝井新三郎の墓があり、その中に孝作も葬られている。

三十八、都竹しめ路墓碑

大雄寺墓地の長坂寄りにある。しめ路は俗名次兵衛といい、墓は高さ約一メートル。文政七年（一八二四）、後裔都竹市右衛門の建立。
夢の世に呑みあかしたる盃を石碑になれど今もいたたく
ゆめ覚えて此の世に残るものとは家名法名石ひなりけり

三十九、丸川江崖碑

大雄寺の墓地にある。明治十八年（一八八五）門人有志が建てた。撰文は阿保春林、江崖は医師で本名は元敬、安政六年（一八五九）高山で初めて種痘を施した人。

四十、赤田臥牛墓

大雄寺墓地に赤田家の墳墓がある。東西三・六メートル、南北五・五メートルの墓域内に石塔三、古墳四が配置されているが、臥牛墳は入口に最も近く、中央に位置し、右に先霊、左に誠軒（嫡孫）、後ろに章斎（嫡子）の墳墓がある。各墳とも同大で、環石を設け、中に盛り土がしてある。誠軒の遺骸は大正十五年小糸坂からここに移された。

四十一、森宗弘墓

雲龍寺裏山墓地の中腹部に東西五十六・七メートル、南北四・二メートルの土地を区画し、東北隅に八段の石段を設けた墓域がある。碑高八六センチ。昭和三十年市指定文化財。安政六年（一八五九）三月十日京都で没、享年四十九。

四十二、津野滄洲墓

東山雲龍寺の墓地内にあり、棹石の正面に「故処士滄洲之墓」と刻んである。碑高一・三メートル。昭和三十年市指定文化財。寛政二年七月二十三日没、享年七十三、法号勇見了義。

『金花三愛集』『飛州燕石録』『橋梁凶纂』『俳歌廻文詠』『産物狂歌詠』等の著作がある。

四十三、指田父子墓碑

雲龍寺の墓地にある。安政五年（一八五六）、指田家が建立したもので、指田孝暢、孝勝父子（ともに地役人）の辞世の歌を彫ってある

明けくれの友と聞にし松風のおとさへ雪にうずもれにけり（孝暢）

われしなはわかなき霊はこむ秋の末野の尾花まねきてやあらん（孝勝）

四十四、土屋秀世墓碑

雲龍寺の墓地にある。弘化四年（一八四七）八月、土屋家が建立したもので、地役人秀世の歌が碑側にある。

あすよりは主なき世とならんともしらてや招く庭のほすすき

四十五、金森将監母墓

将監は金森家家老五千石。建碑は寛永十八年とある。

四十六、阿保春林墓

医師、名は邦彪、号を旭園、按山、小国、帰鳥園、上木清成、富田礼彦に詩歌を、青蓮院に書を学ぶ。

四十七、人間百部一塔

雲龍寺金比羅堂前にある。二木俊恭の撰文がある。

四十八、大乘妙典一石一字塔

雲龍寺金比羅堂前にある。寛延二年（一七四九）信者が建てた。津野滄州の書である。碑高一・五メートル。碑面には「寛延二己巳都市十月二十五日 奉書寫 大乘妙典一石一字 滄州楚義見拜書」とある。

四十九、法華經千部供養塔

雲龍寺金比羅堂前にある。天明六年（一七八六）秋、当時二十四世・仏山海印が建てた。碑の左側面には「受持読誦或書寫 法譬因縁当処圓 始末一乘無雜種 頭々開發火中薰」の偈がある。碑高一・五メートル。

五十、大護摩千座供養塔

雲龍寺金比羅堂前にある。天台宗木食行者無尽秀全が建てた。碑高一メートル。紀元二千五百五十年（明治二十三年・一八九〇）三月十五日結願、とある。

五十一、雲龍寺鐘樓門

当寺の草創は古く、古代に白山社（現在の東山白山神社）の別堂妙観寺という寺があった。後、天台宗に属していたが、応永二年（一三九五）頃堂宇を再建して曹洞宗に改めた。能登の総持寺（そうぢじ）前住「了堂真覚」をもって開山して海蔵山雲隆寺と改称し、応永三十年（一四二三）六月七日に遷化したとある。真覚は

高僧で、宮村の大幢寺も開いている。『高山市史』境内山上の白山権現（現東山白山神社）は、雲龍寺の鎮守として祀られてきた。塔頭（たっちゅう）（境内にある小寺）に栄鏡院、久昌寺がある。

鐘樓門の建物の外観は、ゆるやかな曲線をもつ屋根の頂部に、露盤と宝珠をのせる。初層中央通路の両側にふところを設け、南東側に階段がある。昭和四四年市指定文化財。

桁行四・一五メートル、梁行三・七メートル、重層四柱造、銅平板葺。

